

滋賀の文化情報誌

デュエット

Duet

特集

菩提寺歴史文化資料室

2017 秋 vol.125

満山少苦
寺四至封
之繪圖
即應元其寺
四月九日
所願家所抽爰
司中ニ坊長傳



新撰 淡海木間撰 69

ヒトエグモ

INFORMATION STATION

催し案内 2017 秋

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS

サンライズ出版の新刊案内



企画展

《斎王群行》に見る
菩提寺地域の街道文化

10月23日(月)～11月30日(木)

資料室内。右奥の古絵図が「円満山少菩提寺四至封疆之絵図」のレプリカ（4ページ参照）

特集

菩提寺歴史文化資料室

平成27年（2015）4月に湖南省菩提寺地域のまちづくりの拠点施設として完成した菩提寺まちづくりセンターには、多目的ホールやサークル活動用の部屋と並んで、地元の歴史や文化財を展示する菩提寺歴史文化資料室が設けられました。

常設展示のほか、歴史講座や小学生向けワークショップなどを催し、今年6月には滋賀県博物館協議会にも加盟した同資料室を取材しました。



できあがってきた企画展用のパネルシートを前に。左から、岡本明一さん、氏丸隆弘さん、田中宏明さん、田中秀明さん



↑菩提寺まちづくりセンター
手前が移築された「梵兮葱兮」の碑（8ページ参照）

菩提寺歴史文化資料室

住 所	湖南省菩提寺西四丁目2-12 菩提寺まちづくりセンター内
連 絡 先	TEL 0748 (74) 3471
休 館 日	祝日、お盆休み、年末年始（土・日は休館日もあるため事前にお問い合わせください）
入 館 料	無料
アクセス	JR 石部駅もしくは甲西駅で下車、コミュニティバスあり／名神竜王 IC から約10分、栗東 IC から約15分

取材／編集部 写真／辻村耕司

「まちづくり」の核として、 地域の歴史を次の世代に伝える役割を。

学区単位のまちづくりを進める過程で

まずは、資料室誕生までの経緯をお話しただけですか。



菩提寺歴史文化資料室
運営協議会 代表
田中宏明さん
1939年生まれ（78歳）

田中（宏明） 資料室がある菩提寺まちづくりセンター自体の計画が持ち上がったのは、平成18年（2006）7月、10年余り前です。湖南市の中で一番西北にある菩提寺学区（菩提寺小・菩提寺北小）には、自治会が7つあります。「菩提寺」という昔からある在所と、昭和40年後半から昭和50年代前半にかけて、その周辺に次々生まれた6つの新興団地です。

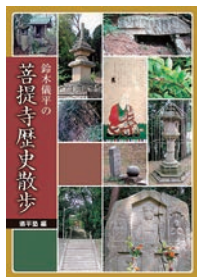
現在、学区内の人口は一万2000人ほどで、規模としては三雲、石部学区に匹敵する、湖南市の中でも大きな方なのですが、これまでしっかりした公的施設がありませんでした。昔からの在所である「菩提寺」区が資金を出して昭和45年（1970）に建設した公民館（菩提寺コミュニティセンター）はあったのですが、それ以外は、自治会がそれぞれ集会所に当たるものを単独で持っていただけです。

地震や暴風雨のときの避難所として学区内すべてをカバーできる大きな公的施設が必要だという話になりました。そうした緊

急時用だけでなく、日ごろ用がなくても来たらおもしろい催しをやっているとか、知り合いの顔を見つけてしゃべるとかいった交流の場がほしいという思いがありました。

当時から行政側も、「地域のことは地域の手でやってくれ」という感じになっていたのですが、その「地域」の単位が問題でした。規模が小さい自治会単位では、動ける人材も少ないので、小学校の学区単位の連合体で「まちづくり協議会」をつくって議論を進めていこうということになり、平成20年（2008）6月に「菩提寺まちづくり協議会」が設立されました。協議会の中には、文化芸術委員会、地域活性化委員会など、いろいろな委員会があります。

私なども昭和50年（1975）によそから新興住宅地に移住してきた人間ですから自治会のレベルでは「われわれがつくった町だ」といった自負もあって、もともと在所の人たちと学区単位での議論をするとなかなか噛み合わないところがあったんです。視点を共有できるものはないかというので出てきたのが、地域の歴史でした。古いいわれのある立派なものがあるじゃないか、これを次の世代へ伝える作業をまちづ



↑儀平塾編『鈴木儀平の菩提寺歴史散歩』（B5判、226頁）。資料室で販売中（1000円）

※1 三雲成持（1540〜1603）戦国時代の武将、三雲城主で、六角氏の重臣。

※2 猿飛佐助 架空の忍者。真田十勇士の一人として真田幸村に仕える。一説に、三雲成持の兄である賢持の子、三雲佐助賢春がモデルとされる。

※3 鈴木儀平（1918〜2009）郷土史家、滋賀県中世城郭分布調査員などを務める。



くりの起爆剤にしようと考えたわけでした。そのコンセプトからまちづくりセンターの中にも、いつでも誰でも見ることができる資料室を設けることになったんです。

——歴史文化をまちづくりの芯にするというのは、見本にした地域があったのですか。
田中（宏） 見渡すとどこでもそうなんです。例えば三雲まちづくり協議会でも、三雲成持や猿飛佐助の名があります。ですから珍しい取り組みではありません。



儀平塾
岡本明一さん
1942年生まれ（74歳）

※3 岡本 菩提寺の場合、郷土史家の鈴木儀平さんの存在がありました。平成20年6月に立ち上がった儀平塾で会合が25回あり、さまざまなお話が聞けました。まもなく儀平さんが亡くなられるのですが、それまでのお話の録音テープをもとにして、郷土誌「鈴木儀平の菩提寺歴史散歩」を完成させたのが、平成23年（2011）1月でした。

制作・印刷を弊社が担当させていただき、儀平塾の皆さんのお話を本誌100号に掲載させていただきましたね。

田中（宏） 大変でしたが、その作業によつ

て、儀平塾のメンバーに地域の歴史に関する知識が蓄積されていったんですね。私もふくめ儀平塾のメンバーが中心になって、平成25年（2013）10月、歴史文化資料室運営協議会を立ち上げることとなります。



↑少菩提寺の坊舎跡とみられる場所から発見された中世の瓦。平成25年9月の台風18号により、菩提寺では土砂流が発生、被害後の小川から多くの遺物が採集された。

※4 少菩提寺 天平3年（731）、良弁僧正によって菩提寺山東麓に開基されたと伝わる寺院。大菩提寺とも称された金勝寺（栗東市）に對して名づけられた。30以上の建物をもつ大伽藍があったと伝わるが、元龜年間（1570〜73）に織田信長と六角氏の戦乱に巻き込まれて焼失、廃寺となった。

※5 椿井文書 椿井政隆（1770〜1837 山城国生まれ）が、依頼者の求めに応じて偽作した神社の縁起、系図、社寺の絵図などのこと。

田中（宏） 平成21年6月から3年計画で「歴史の小徑」500mを整備、平成23年1月には市指定文化財である「円満山少菩提寺四至封疆之絵図」と「教如上人等書状」のレプリカ制作を行いました。地域の歴史遺産をいつでも見ることができるようにと考えたんですね。「少菩提寺絵図」は、西応寺に伝わってきたもので、地名の由来である少菩提寺の姿が描かれています。奈良興福寺官務家の古絵図を江戸時代に模写したとされますが、この作者、椿井権之輔（政隆）は、古文書を装った偽物をたくさん制作したといわれる人物です。

いわゆる椿井文書は、全部が嘘ではないというのが、また困ったところで……。

田中（宏） そうなんです。100%がつくりものではなく、真実も相当含んでいる古絵図のようなんです。ちょうど菩提寺では、

資料室にはできるだけ「本物」を用意したい

資料室の運営協議会立ち上げと同時に、湖南省教育委員会の氏丸さんにアドバイザースタッフとしての派遣を要請なさっていますね。

田中（宏） 毎月1回行っている資料室の運営協議会への参加をお願いしています。

氏丸 職務として参加させていただき、協議会では展示のやり方などをお教えしています。基本的に展示パネルの文章などはすべて委員の皆さんで作成なさって、私はそれをチェックする役目です。あまりに行き



菩提寺歴史文化資料室
アドバイザースタッフ
氏丸隆弘さん
湖南省教育委員会

過ぎていくようなものは指摘したり、2つ説があって確定していないのなら、まあそのままでよいとか。

田中（宏） 対外的なこと、他の博物館への



↑竜王山古墳群から出土した須恵器・土師器。滋賀県埋蔵文化財センターから借用。

質問なども、自分たちでやっています。栗東歴史民俗博物館や野洲市歴史民俗博物館にも何かあったら聞きにいったり、年に3回ほど催している歴史講座の講師をお願いしたり、とてもお世話になっています。

平成26年には、地元の古墳からの出土遺物の貸し出し交渉が始まったそうですが、

田中（宏） できるだけ資料室に「本物」を用意しようとして取り組んだのです。竜王山古墳群（寺屋敷古墳）は、昭和39年（1964）から県教育委員会の発掘調査が行われ、馬具などの金属類は、現在、県立安土城考古博物館に保管されています。それらを借りてきて展示しようと考えたのですが、この展示ケースでは湿度・温度管理が行き届いていないから、金属類はダメですと。そこからは写真パネルだけにして、壺などの土器だけ滋賀県埋蔵文化財センターからお借りしました。

土器類は貸し出し申請が許可されやすいのですか。

氏丸 そうですね。近江八幡市では、施設

をつくって古墳から出てきた馬形埴輪などの副葬品を展示しているところがあります。出土品の重要度にもよりますが、わりに一般的なものなら、県や市はとも収蔵庫がいっぱいですから、貸してもらえますよ。

田中(宏) 最初私ただけで頼みにいき、「ただし湖南市の教育委員会で責任をもって管理していただくのが条件です」ということだったので、氏丸さんに相談がなばってもらって、お世話になりました。

資料室オープンに向けて、映像と音声ガイドの制作などに取り組まれました。

田中(宏) パネルの説明は字が小さくて読めないという人もいるので、音声ガイドを、湖南市出身のラジオパーソナリティー・キダユカさんをお願いしてつくりました。

いろいろな研究者の来室と「土曜日授業」

そして、平成27年4月にオープンなされ、開館してからの主な来室者は、やはり地元住民の方ですか。

田中(宏) それが、去年の企画展でも、私は中世の城を研究している者ですといって北陸の方からお見えになったり。「どこでお知りになったんですか?」と聞いたら、「インターネットで」と言っていました。



菩提寺まちづくり協議会
文化芸術委員会 委員長
田中秀明さん
1947年生まれ (70歳)

田中(秀明) 昨日も2組の来室があったのですが、1組は、奥さんとお見えになった京都山科の学校の先生で、矢穴を研究な

——このセンター建設の予算の中に、この資料室の予算も組み込まれていたんですか。

田中(宏) ここは菩提寺のまん中あたりの高台で、もとは梅林になっていた土地です。裏(山側)は砂防林で、駐車場もふくめた建設費が5億円、その1%(500万円)を7m×7m、49㎡の資料室に使えることになりました。展示できない資料を保管する倉庫15㎡も隣につけてもらい、壁面の展示ケース、平面の移動可能な展示ケース2つ、照明器具を用意しました。当初の展示パネルは65万円かかりました。

——その後の運営費は?

田中(宏) 菩提寺まち協から、年間事業の企画展と歴史講座などに7〜10万円いただいています。しかし、今後5年先くらいを考えると、LED照明への更新などに多額の費用が必要となり頭の痛いところです。

さっているそうなんです。菩提寺にある石造物には矢穴がいっぱいある。三体地蔵の一番右と左の地蔵さんの裏側にもある、菩提寺にある地蔵さんにも矢穴の跡がたく

※6 矢穴 石工が石を割る工程において、矢(フサジ)を入れるために石にノミで掘った穴。



→地蔵菩薩像3体(石造多宝塔と閻魔像と合わせ「一塵少菩提寺石造多宝塔および石仏」として国史跡に指定)。中央の1体は鎌倉時代、両側2体は南北朝時代の作とされ、その2体の裏に矢穴の跡がある。

さんあるそうで、ここでもいろいろ話をしてお帰りになりました。

——菩提寺山周辺の現物とセットで見に来られるわけですね。

岡本 いろいろな専門の研究者の方がお見えになって、こちらが対応できないような時もあります(苦笑)。

氏丸 中世の菩提寺には石工の集団が住んでいたのではないかとわれています。

岡本 花崗岩はきれいに割れるんです。

氏丸 今は日本でやつても採算が合わないので廃業されていますが、最近まで石を切り出す業者さんがおられました。割る時の威力を増すために火薬を使うので、失敗して指をなくした人もいましたね。三雲の石は質がよくて、東京まで出荷していたそうですが、菩提寺や岩根の石はそれほどではありません。

矢穴の研究は、大坂城の石垣の石を切り出した六甲山麓の石切り場を調査なさった兵庫県の森岡秀人さん(元芦屋市教育委員会)から始まりました。最近滋賀県立大学の中井均教授が、三雲城の石垣と観音寺城の石垣を比較して、矢穴の幅が違うから三雲城の石垣は地元で石仏などをつくっていた石工に積ませたのではないかという説を出しておられたりします。

——山野の石にも歴史ありですね。こうして説明していただかないと通り過ぎてしまいます。

田中(宏) 開館以来、秋には企画展、といっても、部分的に展示パネルを貼り替えるものですが、それと、春と秋の年2回、歴史講座を催しています。講師には、氏丸さんや藤岡さん、今年6月の講座では滋賀県教育委員会の松下浩さんをお招きしました。それから学区の2つの小学校の児童を対象とした「土曜日授業」という取り組みも

あります。

田中(秀) 「土曜日授業」は、文部科学省が全国的にすすめている取り組みで、小学校が休みの土曜日を使って、地域の人が小学生にいろんなことを教えるというものです。菩提寺の中を連れて回って説明したり、歴史とは関係なく、ペットボトルのロケットを飛ばしたりもふくめて年間10回ぐらい。今年の夏休みには、「歴史ワークシヨップ」と題して、資料室の展示を子どもたち

り組んでもらいました。40人ぐらい来てできた子には認定書を渡したんですが、わりと好評でみんな喜んでいました。小学1年生から6年生までいるので、難易度別に4段階(初級、中級、上級1級・2級)とつくって。

- ※7 齋宮 伊勢に置かれた齋王の居所。齋王(齋皇女)は、天皇即位の時、伊勢神宮に天皇の名代(代理)として遣わされた未婚の内親王または女王。7世紀後半に天武天皇によって制度化され、14世紀半ばに南北朝の動乱で廃絶するまで約660年間続いた。
- ※8 齋王群行 齋王と供の一行が伊勢の齋宮へ赴く旅のこと。
- ※9 頓宮 仮の宮殿。群行がその地を発てば、解体撤去された。
- ※10 齋宮歴史博物館 齋宮跡に設立された三重県立の博物館。発掘調査にあたりながら、姉妹館にあたるいつきのみや歴史体験館とともに、齋宮の公開普及に努めている。

企画展「『齋王群行』に見る菩提寺地域の街道文化」

—— 続いて、10月23日から11月30日までの企画展「『齋王群行』に見る菩提寺地域の街道文化」についてうかがえますか。

田中(宏) 今年は開館3年目で、博物館協議会に加盟した年でもあるので、ちよつと工夫した内容の展示にしたいと考えました。湖南市という、江戸時代に東海道の宿場であった石部宿が有名ですが、菩提寺も古代には交通の要衝だったようです。

垂水との距離が近すぎるんですね。平成元年(1989)に齋宮遺跡のある三重県多気郡明和町に齋宮歴史博物館ができた時も「甲賀の頓宮」の位置は確定できなかったんです。ただ、当時は、旧東海道のルートのこともあって、三雲説が有力だったように思います。

—— ところが、野洲川を渡って右岸に来たという記録もあると。

そこで、平安京から伊勢の齋宮までを旅した「齋王群行」において、菩提寺に一行が宿泊するための頓宮が置かれた歴史を紹介することにしました。複数ある説の一つではないのですが、信頼性があり、菩提寺の住民でも知っている人は少ないので、ちよつとよいだろうと。

—— 群行が進んだルート上の甲賀の頓宮の位置については諸説あり、菩提寺が候補の一つであるわけですね。

氏丸 頓宮の位置を考える際に問題になるのは、ルートが野洲川の右岸(野洲川の場合北側)を通ったか、左岸を通ったかなのですが、甲賀の頓宮の位置として説があるのは、水口の御厨、三雲、菩提寺の3つなわけです。ただ、水口まで行くと、次の

そうです。伊勢落(栗東市)のところで野洲川を渡ったというのですね。同地に立つ碑にも書かれています。頓宮に入る前に禊をする必要があるのですが、ちよつど伊勢落―菩提寺の部分は野洲川が一番浅いところで、雨さえ降っていなければ容易に渡れたはずです。いまでも野洲川左岸にある何軒かの家は、対岸の菩提寺にある正念寺の檀家さんなんです。夏場とかならず歩いて行き来ができましたので。

江戸時代には幕府が通行者を監視するために舟による「横田の渡し」ができますが、お金がない旅人は夜、常夜灯を目指して歩いて渡ることもあったようです。雨の少ない冬には、土橋がつくられていましたし。

—— 展示のための資料集めはどのように。

氏丸 明和町の「齋王まつり」で昭和60年(1985)から行列が歩くようになり、平成10年(1998)に土山町でも行うようになり、その翌年から京都市の野宮神社が「齋宮行列」として開始しました。京都市のものは最初、京都から伊勢まで歩く催しをしたいという呼びかけが一度ありましたが、結局成立しなかったですね。

もう一カ所、初期に頓宮が置かれた伊賀市柘植町でも、平成15年から齋王群行を再現した催しが行われているそうです。

田中(宏) 企画展では、第18回あいの土山齋王群行(平成27年3月)を撮影したビデオをテレビで流します。動く映像や音があるのは願ってもないことですからお借りし

田中(宏) まず、垂水の頓宮があった甲賀市土山町の土山歴史民俗資料館に行つて土山町で毎年「あいの土山 齋王群行」という催しをやっている実行委員会を紹介してもらいました。企画展の計画をお話したら、実行委員会が撮影なさったビデオを貸してもらえることになりました。

—— 若い女性の齋王を中心に平安時代の衣装の行列が街道を歩く齋王群行は、絵になるので各地で再現する催しが行われていますね。



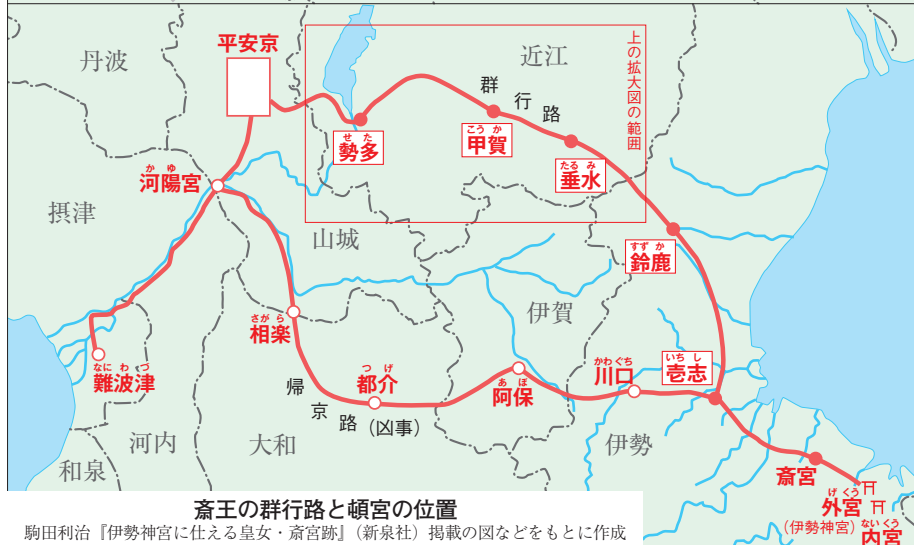
↑→斎王群行を再現した「あいの土山斎王群行」(表紙を含め3点とも、あいの土山斎王群行実行委員会提供)



たのですが、3巻、1時間以上あり、準備から、当日の来賓のあいさつ、片づけなど全部をそのまま流しても仕方ないので、編集して16分の長さにしました。一応、実行委員会さんに許可をもらいにいったら、「ええなあ、うちにも一本くれ」と言われて、コピーを渡してきました。

その他、いろいろな方に協力いただいたのですが、特にお世話になったのは斎宮歴史博物館の榎村寛之さんです。

——斎王群行に関する著作も多い、第一人者と言ってよい研究者の方ですね。



斎王の群行路と頓宮の位置

駒田利治『伊勢神宮に仕える皇女・斎宮跡』(新泉社)掲載の図などをもとに作成

田中(宏) 博物館にうかがって、我々が考えているパネルの内容をお見せしたんです。すると、解説文の間違い、ルビを振る箇所などを、指示いただいたて、写真も「ネットの写真を勝手に使ったらいけません」とおっしゃって、館から写真を貸し出していただけたことになりました。

できあがった企画展のパネル展示は、壁面の一角と、平面展示ケースの半分だけを使い、評判がよければ、そのまま恒久展示にするかもしれません。

ちょうどパネル用シートができあがって

きたので、それをご覧いただきながら説明します(左図を参照)。ポイントとなる部分は先ほど氏丸さんがおっしゃいましたので、くり返しになる部分もあります。

都が平城京だった奈良時代の群行ルートは、この図の帰京路(天皇崩御や身内の不幸などによる退下のルート)に近いものであったわけですが、都が平安京に遷った平安時代にもルートの変化がありました。それを説明するために、平安京からの群行の道のをたどってみます。

天皇が即位すると、内親王の未婚者の中

から占いで斎王が選ばれます。斎王はまず宮城内に初斎院（しよさいいん）を置いて約1年間斎王します。つづいて宮城の外に野宮（ののみや）を造営してさらに約1年間暮らします。ようやく3年目に斎王は数百人の供を従えて伊勢に向かいます。京を発つて、最初の宿泊施設である頓宮（とんぐう）は勢多（せた）（瀬田）にありました。もともと近江国の国府があった場所だそうです。それから、甲賀、垂水、鈴鹿、沓志の頓宮を経て、5泊6日で斎宮に到着したとされます。

近江国から出る道は、平安時代初期には倉廩道（くらぶなのみち）（杣街道）（そまかいだう）を通していったん伊賀国に入り、柘植（つげ）で東に向かうルートでした。その当時は、伊勢落から野洲川は渡らずに、三雲へ進んでいたようです。その後、新たに開かれた阿須波道（あすはみち）が886年から正式な道となります。菩提寺に頓宮が置かれた可能性があるのは、このルートの時代です。

11世紀半ばに後朱雀天皇が即位すると娘の良子内親王が斎王に選ばれました。長暦2年（1038）9月、良子は斎宮へ向かうのですが、この時、随行した藤原資房（すけふさ）という貴族が書いた『春記』（しゅんき）という日記が残されているんです。これを平成5年（1993）に古瀬奈津子さんという研究者が活字化されて、国立歴史民俗博物館の研究報告に発表なさいました。その中の該当部分と、それを榎村寛之さんが現代文になおされたものをパネルにして展示します。

「明治150年」の来年に向けて

最後に、資料室の今後の予定などを。

氏丸 来年の1つの方向としては、「明治150年」の節目なので、明治の建築物や人物を県でもクロージアアップさせようとしているようです。菩提寺の場合、山地の緑化を主導した龍池藤兵衛さんという偉人が

それをたどっていくと、2日目の申（さる）の刻（午後4時頃）に勢多頓宮を出発して、同日の夜に甲賀の頓宮に到着しました。この時の時刻は書かれていないのですが、到着前に橋のない川の中を歩いて渡ったと記しています。現在の瀬田―菩提寺間の距離は16〜17kmですので、斎王を乗せた輿（こし）をふくむ行列だとしても5時間で行けるでしょう。そうすると、午後9時に到着します。渡った川は野洲川と考えられます。3日目は、午前11時頃に出発して次の垂水に申の刻に着いています。

これが水口だとすると瀬田からの距離が27〜28kmも離れていて、到着が深夜になってしまいます。逆に垂水との距離は11〜12kmしかなく近すぎるんですね。もう一つの三雲は、野洲川の左岸なので渡る必要はななく日記の記述と合いません。これは菩提寺説を支持するしかない（笑）。

そこで、この時の甲賀の頓宮が菩提寺のどこにあったかと考えるわけです。100人以上、多い時は500人もいたという供人もふくめた宿泊施設ですから広い平地が必要だったはずですよ。私たちは斎神社の裏今の北山台の一带かなあと想像しています。

——失礼を承知で言いますと、以前の田中さんは、専門的な歴史の話は他のメンバーに任せるよという感じだったのに、こんな解説をお聞かせいただけるとは……。

田中(宏) 驚いた？ 自分でも驚いている（笑）。
いらっしゃいますから、それをメインに持ってこれるかなとは思っていますね。

田中(宏) やっぱり菩提寺といえは、「梵（ぼん）中（ちゆう）」の碑。今はこのまちづくりセンターの正面に立っていますが、藤兵衛さんの趣旨に賛同してみんなが手弁当でハゲシバリ

※11 春記 藤原資房（1007〜1057）の日記。書名は資房が長く務めた「春宮権大夫」に由来。自筆本は伝わらず、写本が東寺に伝来。京都国立博物館蔵。重要文化財。

※12 斎神社 湖南市菩提寺の旧村社。天平時代に少菩提寺の守護神として建立されたと伝わる。元龜元年（1570）の火災で焼失、享保13年（1728）に再建。

※13 梵（ぼん）中（ちゆう） 意「ハゲ山が青くなった」という意味。大正12年（1923）、砂防工事を記念して建てられた。

※14 ハゲシバリ カバノキ科の植物ヒメヤシャブシの別名。やせ地でもよく育つため、ハゲ山の緑化に用いられた。

の苗を植えたという。それがこれからのまちづくりにも見本になるかなと思います。

氏丸 例の聞き取りは始まりましたか？

田中(秀) 9月26日からやる予定をしています。古い菩提寺の在所のお年寄りが、ご両親や祖父母から聞いた話をまとめようとしているんです。老人会で人選してもらって集まっていたら、録音を文字に起こして、冊子にできないかと。9月に1回と10月に2回の日が決まっている状態です。今では、聞き伝えの話で真偽が確かめられなくてもいいと思うんですよ（笑）。それを聞いて他の人が「そういや、こういう話もあったな」と思い出してくださったら。

氏丸 湖南市のまちづくりの提案型交付金で、お金が出るとです。

田中(秀) 菩提寺まち協からは2つ申請して、もう一つは、地域の行事や祭りを映像記録に残す取り組みです。各自治会の夏祭り、斎神社の祭り、和田神社の愛宕祭り、お寺の花祭りなどを撮影してきました。自治会夏祭りの撮影はもう今年で3回目、以前の映像は30分ぐらいに編集してDVDに焼き、7つの各自治会に配りました。

——お忙しいところ興味深いお話をありがとうございました。（2017.9・15）

ヒトエグモ

Plator nipponicus (Kishida, 1914) クモ目ヒトエグモ科

甲賀市みなくち子どもの森自然館

河瀬直幹 なおき

ヒトエグモは、頭部先端から腹部後端までが5〜8mm（脚を含めた横幅は約20mm）と小型のクモ類です。しかし、その特異な形態と、生態の謎から、日本のクモ関係者の間で注目されています。

まず、ヒトエグモの体形は、クモ類で最も扁平^{へんぺい}と言われており、厚さが1mmに満たない体です。「ヒトエ」は^{ひとえ}「単衣」裏地がない薄い和服^{わふく}に由来します。この体で、屋外の石垣や土塀の狭い隙間に潜んだり、家屋内では本の間から発見されたりして驚かれます。人に見つかったも、完璧に平たい姿勢のまま、ゆっくり横歩きで逃げる様子は本当に奇妙です。



↑重ねた植木鉢の内側に潜むヒトエグモ雄
(2017年3月、大津市、清水良篤氏撮影)

つぎに生態ですが、非常に稀なクモで、既知のほとんどの記録は京都府と大阪府の旧市街地で、単発的なものでした。しかも寺社や古民家の家屋周辺にのみ発見され、野外の森林などで見つからないことが謎を深めます。このため、日本蜘蛛学会元会長の吉田真氏は、ヒトエグモが韓国各地に分布することから、古い時代に朝鮮半島から渡来した荷物に潜んで、京都や大阪の市街地に侵入した外来種でないか!?との仮説を提起しています。

このヒトエグモの1雄が、2017年1月、甲賀市水口町京町の民家で古本を整理中の男性により発見され、みなくち子どもの森自然館に届けられました。極めて珍しいクモ発見のニュースが広がると、滋賀県内の長浜市、近江八幡市、大津市、甲賀市から予想を上回る新情報が届きました。そのうち、長浜市尊勝寺町と大津市札のお寺からは、各1雄の標本が得られ、滋賀県内における分布が明白となりました。また同年、関西クモ研究会の藤野義人氏により京都市街のヒトエグモ生息分布調査の結果が会誌に掲載され、市街広域の寺社の石垣や物置等から多数記録が報告されました。

以上のとおり、これまでクモ研究者が家屋を積極的に調査しなかったために稀だったようです。古くからの市街地がある京都や滋賀には、このクモが確実に生息しています。意外に身近かもしれないヒトエグモに、ちょっと注目してみてもいい？

↓原寸はこのぐらい



2017年NHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」特別展 戦国！井伊直虎から直政へ

開催中～11月28日(火)

彦根城博物館

NHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」にて亀之丞(井伊直親)が吹いた笛のモチーフとなった「青葉の笛」や、「直虎」の花押が入った唯一の古文書などを展示。戦国時代、井伊直虎(?～1582)



朱漆塗仏二枚胴具足
(彦根城博物館蔵)

の波瀾に満ちた生涯と、直虎に養育され、徳川家康の家臣として活躍した井伊直政の、彦根藩井伊家創設に至る道程を紹介します。

入館料：大人500円、小中学生250円

休館日：特別展会期中は無休

お問い合わせ先：TEL 0749 (22) 6100

謙蔵と小蘋・小蕙

—野口家三画人の共演—

I期：11月1日(水)～11月21日(火)

II期：11月23日(木)祝～12月17日(日)

愛荘町立歴史文化博物館



野口謙蔵《冬田と子供》
(滋賀県立近代美術館蔵)

野口謙蔵(1901～1944)の絵は画面構成や描写、筆法などが日本画に近いことから「日本画的な洋画」と評されます。本展では、謙蔵とその画風に影響を与えた伯母で南画家の小蘋(1847～1917)とその娘、小蕙(1878～1945)の作品を堪能していただきます。

入館料：一般300円、小中学生150円

※「関西文化の日」11月18・19・25・26日は入館無料

休館日：月・火曜日

11月は11月22日を除き全日開館

お問い合わせ先：TEL 0749 (37) 4500

近江富士の名で知られる三上山。これを神体山とする御上神社(滋賀県野洲市三上に鎮座)が平成30年に遷座1300年を迎えることを記念して、同社の歴史と文化を紹介します。

入館料：大人200円、高大生150円、小中生100円

※「関西文化の日」11月18・19日は入館無料
休館日：月曜日

■記念講演会

「御上の祝と近淡海安国造」

—三上山周辺をめぐる古代史—

11月4日(土) 午後2時～4時

講師：大橋信弥氏(近江古代史研究会代表)

定員：120名 参加費：要入館料(申込不要)

■展示解説

11月12日(日) 午後2時～

講師：齊藤慶一(野洲市歴史民俗博物館学芸員)

お問い合わせ先：TEL 077 (587) 4410

手仕事の時代

—文字からたどる民俗資料のルーツ—

開催中～11月26日(日)

栗東歴史民俗博物館

栗東歴史民俗博物館に収蔵されている3,000件余りの民俗資料(民具)のなかには、いつ、だれがどこで購入もしくは作製したのか、あるいは誰が所有するものか、といった文字情報が記されたものがあります。



展示風景

本展では、こうした文字情報から、今は博物館に収蔵されている民俗資料が、だれの手で作られ、栗東へやってきたのか、そのルーツをたどります。

観覧料：無料 休館日：月曜日、11月24日(金)

■関連企画

講演会「古文書、農具から見た

滋賀県内の農具屋」

11月4日(土) 午後2時～4時

講師：大塚活美氏(京都府立京都学・歴史館 専門幹)

大西稔子(栗東歴史民俗博物館学芸員)

参加費：200円(資料代)

定員：80名(当日先着順)

お問い合わせ先：TEL 077 (554) 2733

近江商人・野口家十一屋コレクション展

開催中～11月19日(日)

観峰館



野口小蘋《宜男富貴図》

山梨県甲府市で醸造業を起こして繁栄した野口家。その4代目当主の野口正忠(号・柿邨)は事業経営のかたわら学問・芸術を愛好し、当時一流の書家や画家たちと交流を重ねました。また、子息の妻は、日本を代表する女流画家の野口小蘋でもあり、野口家には、江戸から明治にかけての書画の逸品が多数所蔵されています。

山梨県立美術館に寄託されている「十一屋コレクション」を里帰りさせ、柿邨が収集した珠玉のコレクションをご覧ください。

入館料：一般1000円、高校生・学生800円、中学生以下無料(各種割引あり)

休館日：月曜日

■関連講座

11月11日(土) 午後1時～2時

参加費：500円 定員：20名

お問い合わせ先：TEL 0748 (48) 4141

近江の古社 御上神社の歴史と文化

—遷座1300年記念—

開催中～11月19日(日)

野洲市歴史民俗博物館(銅鐸博物館)



重要文化財 木造狛犬 1対 平安時代
(御上神社蔵)

主催：ブックインとっとり実行委員会
第30回地方出版文化功労賞
奨励賞受賞！

橋本道範編著『再考ふなずしの歴史』

昨年10月に米子市立図書館（鳥取県）で開かれた「ブックインとっとり2016」に出品展示された全国の地方出版物（鳥取県と東京23区の出版社を除く、約350点）の中から推薦委員と一般来場者による投票によって選ばれた10点を対象に、6月18日（日）、最終審査会が行われ、サンライズ出版発行の橋本道範編著『再考ふなずしの歴史』が奨励賞を受賞しました。

10月29日（日）には鳥取県立図書館大研修室において、表彰式・受賞記念講演会（『『ふなずし』研究のこれまでとこれから』橋本道範氏）・記念シンポジウム（第1部「韓国へ広がるブックイン」、第2部「地方出版とブックインのこれから」）が開催されます。

書店にて
発売中



第20回日本自費出版文化賞に
2冊が入選！



10月7日の表彰式にて。前列右端が松宮哲氏、後列右端が野村赤一氏



NPO法人 日本自費出版ネットワーク 企画
A5判並製本 総194頁 2000円＋税
大賞受賞者インタビュー、審査員講評、部門賞、特別賞、入選作品のほか、応募作の全書名・著者名を収録。巻末に日本自費出版ネットワーク加盟業者一覧、第21回日本自費出版文化賞の募集要項（募集期間：11月1日～2018年3月31日）を付す。



旅が、博物館が、もっと楽しくなる講演会！！

旅と博物館

—博物館の愉しみ方—

11月19日（日） 午後1時30分～4時30分

会場 野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）研修室

松尾芭蕉・司馬遼太郎・白洲正子など、近江の奥深さを知る文化人は少なくありません。毎日新聞にコラム「酔狂道中記」を連載中で、観光学のエキスパートである高田公理先生の講演と、滋賀の名だたる博物館の名物館長や広報部員による、ちょっと聞けないお話に耳を傾けてみませんか？ 滋賀県博物館協議会設立35周年を記念して講演会。座談会を開催します。

定員 先着100名

講演 「旅と博物館

—博物館の愉しみ方—」

講師：高田公理氏

（武庫川女子大学名誉教授）



座談会 「みんなで語る！ 滋賀県の博物館と旅・観光」

話者：高田公理氏

篠原 徹氏（滋賀県立琵琶湖博物館長）

八杉 淳氏（草津市立草津街道交流館長）

南部暁子氏（MIHO MUSEUM 海外広報担当）

お問い合わせ先 滋賀県博物館協議会事務局（長浜城歴史博物館内）
TEL 0749 (63) 4611

参加無料
申込不要

開館25周年記念 平成29年秋季特別展

青銅の鐸と武器

—近江の弥生時代とその周辺—

開催中～12月3日（日）

滋賀県立安土城考古博物館



（上御殿遺跡出土銅剣・銅型）
（滋賀県教育委員会蔵）

野洲市大岩山遺跡出土の銅鐸群は、近江の弥生時代を特徴づける重要な要素のひとつです。また、近年では高島市上御殿遺跡で特殊な形をした銅剣の鋳型が出土して、大きな話題を集めました。

本展では、これらの青銅器や鋳造関係遺物をはじめ、県内の主要な遺跡および同時代の近畿や東海地域の関連遺物を展示することにより、近江の弥生時代の特徴について明らかにします。

入館料：大人890円、高大生630円、小中生410円
休館日：月曜日

■特別展記念講演会

「青銅器の発達と近畿の弥生社会」

11月12日（日） 午後1時30分～3時

講師：森岡秀人氏（関西大学大学院非常勤講師）

会場：安土城考古博物館セミナールーム

定員：140名（当日受付午後1時～ 先着順）

参加費：500円

■関連博物館講座

11月23日（木）祝 午後1時30分～3時

「弥生時代青銅器工人の系譜

—銅鐸群と送風管—」

講師：清水邦彦氏（茨木市立文化財資料館）

12月3日（日） 午後1時30分～3時

「稲部遺跡と近江の青銅器生産」

講師：戸塚洋輔氏（彦根市教育委員会）

会場：安土城考古博物館セミナールーム

定員：140名（当日受付午後1時～ 先着順）

資料代：200円

お問い合わせ先：TEL 0748 (46) 2424



クックしが 地産食材かんたん新レシピ

滋賀の食事文化研究会食事バランス部会 編
A5判並製本 総140頁 1800円＋税

セタジミのパエリア風、日野菜とチーズの豚肉巻き……滋賀県産の魚介や野菜を、洋風・中華風・エスニック風に調理し、地産食材を消費につなげる創作レシピを多数収録。



おふみ 淡海文庫59 京近江の武将群像

京都新聞社 編
B6判並製本 総228頁 1500円＋税

浅井長政や明智光秀、石田三成、大谷吉継、蒲生氏郷、藤堂高虎、井伊直政ら、京近江ゆかりの武将26名の生涯を追う。京都新聞に2003年6月から2004年5月まで連載され、大反響を呼んだ記事を待望の書籍化。



ごうしゅうおんど 滋賀の盆踊り江州音頭 歌は八日市・踊りは豊郷から

ようの
丁野永正 著
四六判並製本 総260頁 2000円＋税

江州音頭が再び脚光を浴びることを願い、江州音頭の歌と踊り、それぞれのルーツを探り、明治後期の大阪で巻き起こった大ブームのようす、流派・系統図などをまとめた一冊。

琵琶湖岸からのメッセージ 保全・再生のための視点

西野麻知子・秋山道雄・中島拓男 編
B5判並製本 総248頁 3500円＋税

滋賀県琵琶湖研究所と、滋賀県琵琶湖環境科学センターが琵琶湖岸を1kmごとに区分し調査したデータを基に湖岸の現状と変遷を社会科学、地理学、生物学の観点から論じる。



にじいろ宝箱 滋賀でがんばるお友だち

滋賀県児童図書研究会 編
A5横変判並製本 総184頁 1400円＋税

滋賀県にある多くの小学校、幼稚園、保育園でがんばる子どもたちをテーマに、ハタミミズの発見、守り伝えられる民俗芸能、オオサンショウウオの保護などのお話を「宝箱」に詰めました。



改訂増補版 たけおさ 竹箴 製作と修理の方法

今里哲久・合原厚・西尾一三・西尾充代・野村千春・大橋滋 著
A5判並製本 総198頁 2000円＋税

手織に欠かせない道具、竹箴は2002年を最後に日本では製造されなくなった。忘れられようとするその製造と修理の方法を図版と写真も交えて記録した2012年発行の初版を全面的に改訂増補。

近江旅の本 近江の酒蔵【新版】

滋賀の日本酒を愛する酔醒会 編
A5判並製本 総128頁 2000円＋税

名水と好適米、伝統の技に支えられた滋賀の日本酒ガイドブック。宿場町や湖畔にたたずむ酒蔵を訪ね、美酒を味わい、酒と合う郷土料理を紹介する。12年ぶり待望の最新版。



11月
中旬
発売

里山料理ノオト

江南和幸 著
A5判並製本 総160頁 2400円＋税
季節の恵みを直接感じられる山野草について、自らのスケッチを交え、その特性・採取方法から調理までを紹介。珍しいキノコ料理にも言及。自然の風味をそのまま生かして楽しむための指南書。



表紙写真 菩提寺歴史文化資料室の展示ケース

編集後記 本誌特集で名前が登場する櫻村寛之さんの著書『斎宮—伊勢斎王たちの生きた古代史』（中公新書）が、書店に新刊として並んでいたので購入。「あとがき」の著者の助言を無視して、第1章で斎王成立の背景に近江政権と壬申の乱があったことを知り、第2章で菩提寺の地に願宮を置いたかもしれない良子内親王に関する記録を読んでいると、「単衣」の語が現れ、まったく偶然ながら9ページ掲載の節足動物がとても雅な生き物に思えてくるのでした。㊦

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社 Duet 編集部
TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。
<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先